

[2月定例山行] 鋸・斧 担いで「薩摩街道・高岡筋」散策

第一部 岩屋野から 和石(よれし) (令和3年2月20日)

多田 周廣

今回定例山行の2ヶ月位前に畑島さん等仲間4名と事前調査の為此の街道を歩いた。6、7年前に比べると街道が随分荒れている。地元の案内人の前田さんに電話をすると、最近では歩く人が少なくなっているのだとの事。(前田さんとは電話のやり取りだけで面識はないのだが) 邪魔な倒木の枝等を整理しながら歩きたいと了解を取りこの日の定例山行になった。

天気晴朗、朝8時大淀川河川敷ゴルフ場に男性7名、女性6名合計13名が集合。 各々がノコ・オノを持参して岩屋野から和石の約8キロを目指す。9時半に街道出発点、岩屋野に到着。川越さんの準備体操後出発。「薩摩街道・高岡筋」はいつ頃開かれたのであろうか。記録に出てくるのは明応4年(1495)伊東氏が本庄から当時領内の高城までの街道として開通させた。当時伊東藩は霧島盆地まで領有していた。高千穂の峰の鉦も伊東氏が建てたとの伝えがある。しかし天正5年(1577)伊東氏の豊後落ち以降は薩摩の領域となり「薩摩街道・高岡筋」と呼ばれるようになった。

本日散策する街道は「薩摩街道・高岡筋」のほんの一部である。色々な伝えを見ると「薩摩街道・高岡筋」は佐土原藩から薩摩都城藩の間の街道を呼ぶようである。当日、私は街道の清掃・枝払いと、ノコ・オノを片手に意気込んで歩き始めたが、前回とは雰囲気異なる。多分、前田さんから有志の方々に声がかかったのであろう。気になっていた大木まできれいになり、ところどころ十分ではないが伐採され快適な街道になっている。ノコ・オノを持参して貰った会員の皆には申し訳ない思いであった。それでも数十本の大小の枯れ枝等を整理しすっきりした。

このコースのスタート岩屋野には昔、草鞋などを売る茶屋などもあったという。これから難渋する去川までの10⁺以上を踏破する為に旅人たちはこの岩屋野に鎮座する「熊野権現」に無事を祈り国見峠・和石・去川へと向かったことであろう。この道は記録によると1648年に島津光久、1848年島津斎興、1853年島津斉彬、1862年には生麦事件を起こしその帰路として島津久光の各藩主が通過している。途中、国見山(407m)の峠には野立と呼ばれる休息の場がある。我々も12時ちょっと前に到着一息ついた。藩主の休憩となると草の上にゴザでは済まされず臨時の木組みの席亭を立てたと言われ、付き人達は大変であったろう。特に1853年斉彬の「太宰御巡見日帳」には「お供人数上下330人位」と記してある。

また、寺田屋騒動で事を起こし捕らえられた大山巖、西郷従道等も縄を掛けられてこの街道を歩いている。特にこの岩屋野から和石・去川の道中にはいろいろの遺跡が残されているが、道中の無事を祈る「山の神の遺跡」が多い。しかし年々その遺跡も風化しているようで今回は「山の神の碑」が五体と「敷石」と書いた石碑しか確認できなかった。この「敷石」の置かれた場所では鹿一頭が街道を横切った。今まで数回この街道を歩いたが、鹿を見たことはなかった。それほど人の通りが無くなったということだろう。

高圧線の鉄塔下を過ぎると和石の人家と田畑が目の前に広がる、昔の旅人一同もホットしたことであろう。我々も2時頃に和石に到着。十数軒の農家がある。よくこの不便な山奥に住んでいるものだと思うが約450年前から人が歩いていた道中筋だったと思えば不思議ではない。前回歩いた時も牛の鳴き声だけが今でも耳に残っている。今回も牛達は「お疲れさん」と我々を歓迎してくれた。気持ちのいい山行であった。次回は和石から去川を目指したい。

<参加者13名>多田登美子・栗林淳子・橋口三枝子・蔵屋とよ・白賀智子・吉永美知恵・荒武八起・武田芳雄・多田周廣・桜木勉・畑島良一・四宮林三・川越政則

<コースタイム> 岩屋野9:30発～野立て跡11:00～高圧線鉄塔下13:30～和石14:00



岩屋野集落、薩摩街道入口



木漏れ日の中の快適な径

第二部 和石から去川関所(令和3年3月9日)

今回は難コースである。高岡ビタミン館9時集合、近くの郵便局の駐車場に車を置かせてもらい(橋口三枝子さんの計らいか) 3台で去川を目指す。一台を去川大イチョウの木の下に置き2台で和石へ(車なら去川から和石まで15分も掛からない)。9時50分和石に到着ここにはオキナグサの群生地がある。折角の機会でもあり見学する。可憐な花である。チラホラと散見されるが満開まで2週間くらい早いとのこと。機会があれば再訪したい。

さて街道のこの区間は相当荒れている。スズメバチも多いので歩かないほうが良いと地元の人から再度助言があり、途中引き返すことを覚悟で女性4名男性5名で敢行した。距離約2.5^{km}、長い距離ではない。この道筋には和石までの街道と同じように途中、野立などの旧跡が残っている。

10時30分登山口出発、ところどころは荒れているがアップダウンは少なく、思った以上にすっきりしている。話に聞いたスズメバチも季節外れか全く見ない。緊張もほぐれ足取りも軽くなった。前回と同じく全員がノコ・ナタを持参しての行動でまたもや期待を裏切られたかと思ったが、この後このノコ・ナタをフル活用してもらうことになる。

この街道の三分の二位進んだ標高約200mの地点に11時40分位に着いた。突然視界が開ける。眼下には去川のイチョウの大木とその近くに置いた私の車もはっきり見える。何か気が抜けた思いである。休憩地点のすぐ横には下っていく街道筋もはっきりと残っている、ここから歩いて約30分以内でイチョウまで到着と判断。昼食は大イチョウの木の下で食べることにする。しかし、ハッキリ残っていると思った街道筋はその休憩地点から20m位下の方で無残にも崩壊しており、行き場を失った。そこから力を発揮したのが我が荒武支部長、トラバースしながら道なき道をナタで切り進む。私も宮崎百山を完登した中であった藪漕ぎを久しぶりに思い出し気合の入った山行きになった。無鉄砲な冒険はできないがこのような山歩きもまた楽しい。鹿の防除網等を潜り抜けながら13時40分やっとのことで去川の大イチョウに到着。1時間以上の遠回りをした。しかし、参加者一同、特に80代のメンバーの体力の頼もしさを改めて感じた。結果的に後半の道はどこで間違ったか、正確な街道の完登はできなかった。今一度の調査が必要である。

<参加者9名>谷口敏子・服部澄子・栗林淳子・橋口三枝子・荒武八起・武田芳雄・多田周廣・服部岩男・畑島良一

<コースタイム>ビタミン館集合9:00～和石着9:50～登山口10:30～標高200m地点11:40～去川・大イチョウ着13:40



和石からの入り口



深くえぐられた古道

薩摩街道をゆく

谷口 敏子

殿様の籠が通りしほどの幅こぼれ陽揺るる薩摩街道

四代の参勤交代見し森よけふは越えゆくわれら山旅人

やまんちゆ

手探りの厳しき下りの岩陰にサツマイナモリしろしろと咲く

四時間を澄子さんの背に揺られ来し熱きコーヒー旨かりしこと

段丘の和石の丘は殿様の宴の跡か 翁草咲く